

刊行の意図

藤澤健一（編集委員代表）

本復刻は、沖縄戦の終結以後、米軍による奄美、および琉球諸島（沖縄、宮古、八重山）の占領初期に各群島において刊行された教員団体による機関誌（一九四七年から五〇年代はじめまで）を可能な限り集成し、編集刊行するものである。アジア・太平洋戦争下において組織的な機能の消滅や断絶を被りながらも、各団体は教育会などの戦前期の組織を継承しつつ各群島において結成された。復刻対象は、奄美大島連合教育会「教育大島」、奄美大島連合教職員組合「教育と文化」、沖縄教育連合会「新教育」「新教育ニュース」、宮古教育会「宮古教育」「教育時報」、八重山教育会「新世代」である。各機関誌は群島別の分割統治期に刊行されており、群島ごとの個性が色濃く反映される。

現在の書誌調査をもって、すべての機関誌において刊行の全体像はあきらかではない。そのため、これまでは個別に参照されるにとどまってきた。本復刻は四群島の機関誌を体系的・統合的に捉えた、研究史上、はじめてのこころみとなる。

奄美・琉球における教員団体機関誌に着目する意義はなにか。それは各群島が米軍により直接占領されたという、大和とは異なる固有の占領経験をもつことにあるが、それだけではない。占領による必然的な帰結として、現実においても在日米軍基地が沖縄の人びとの日常と精神を苛みつつけていること、そして、そうした現実の起源というべき時代の証言が盛り込まれているからにはかならない。教員団体機関誌でありながら、あるいは教員団体機関誌であるからこそ、同時代の社会と文化、人間の息吹が生きて伝わってくる。

占領という揺るがぬ現実に教員たちはどうに対処してきたのか。沖縄現代史を構成した基礎史料として本復刻を刊行する。

原誌発行——奄美大島連合教育会、奄美大島連合教職員組合／宮古教育会／八重山教育会／沖縄教育連合会

占領下の奄美・琉球における教員団体関係史料集成

1947年2月～1953年3月 全7巻・別冊1「編集復刻版」 不二出版

A4判／上製／総約二、四四〇ページ

◎揃定価——本体199,000円＋税 ISBN978-4-8350-7833-5

◎配本——全3回配本

第1回配本（第6巻・第7巻）＝2015年12月刊行 本体56,000円＋税 ISBN978-4-8350-7842-7

第2回配本（第1巻～第3巻）＝2016年4月刊行 本体84,000円＋税 ISBN978-4-8350-7834-2

第3回配本（第4巻・第5巻

＋別冊1）＝2016年7月刊行 本体56,000円＋税 ISBN978-4-8350-7839-7

◎別冊——解説・総目次・総索引・附表（分売価格本体2,000円＋税）ISBN978-4-8350-7845-8

◎編集委員——（代表）藤澤健一・近藤健一郎・櫻澤誠・高橋順子・戸邊秀明。（編集協力）田中萌葵。

◎推薦——弓削政己・仲宗根将二・大田静男・川井勇

奄美諸島の新制教育の理念、具体的教育活動、戦前教育者への批判、復帰運動や地域の動向や変化と背景を示す書

弓削政己（奄美市文化財保護審議会会長）

一九四七年、泉芳朗は「教育と民主革命」と題し、戦前の軍国主義教育への批判的見地や「月齢」などこれまで知られていない詩三点を掲載しているのが『教育大島』（奄美大島連合教育会刊行）であった。武力や権威に迎合する事大主義的態度は、「今日は民主主義者に豹変」しても恥ずべき行為でもないといわれる傾向に、深い自念を申し立て、一方、三機関（鹿児島県教職員組合奄美地区支部ほか）から収集したこの月刊誌は、新教育、個性を模索し日本の新制度の教育情報をカリキュラムや各教科の考えを新聞や書籍から貪るように紹介をする。

そして、奄美諸島の教育内容をどうすればよいか、主に奄美諸島各地の教育従事者の苦労や意見、具体的方向性の提案、郡内教育研究会の動向を示したのが、題名を変えた『教育と文化』である。

同時に「日本復帰」運動と重なっていたため、いずれも復帰に関して、考え方の変化や背景をとらえる端緒も示している。沖永良部島、与論島は復帰から取り残されるのではないかと、「二島分離論」、貧困な校舎や教育条件に対する児童、生徒の声を掲載している。また、低い教員の給与の状況も明らかにされている。PTAのいわゆる「あかつち文化」に類する背景や産業復興など、様々な内容がある。密航による教科書入手と共に、この月刊誌により当時の教育動向が幅広く理解できる。それは『自由』、『新青年』とともに、当時の状況を教育の視点で検討させられるものである。

宮古圏域を知る貴重な資料

仲宗根将二（宮古郷土史研究会顧問）

先の大戦では宮古は三つの軍用飛行場を中心に全域軍事基地化され、およそ三万の陸海軍将兵が展開した。地上戦こそなかったものの、連日の米・英軍の猛爆と艦砲射撃で、平良のまちをはじめ、集落の大方は焦土と化した。米軍の占領行政は一九四五年十二月八日開始されるが、人びとは国・県と関りなく「自立」を模索していた。明治以来の沖縄県宮古支庁長を会長とする、官制の宮古郡教育部会は一九四六年九月、「宮古教員組合」に生まれ替った。事業方針の筆頭に「教員の経済的、社会的並に政治的地位の向上」を掲げ、初めて開設された宮古郡会議員に委員長を推薦するなど、活発な活動を開始したが、教員組合は米軍の許可が得られず、一九四七年七月、改めて「宮古教育会」として再発足した。

同年九月一日、機関紙『宮古教育』（月刊）が創刊された。創刊の辞は冒頭に「軍国主義の強制と封建的イデオロギーの桎梏から解放された」と記している。明治以来の「皇民教育」への反省とも受けとれよう。一九五〇年四月には専任の編集者において、『教育時報』（のち『宮古教育時報』）に改め、週刊に発展している。論壇も設けられ、PTAの必要性、教育委員会制度の確立、育英会の設立等も提唱されている。

一九五二年以降は月六回刊、隔日刊へと発展し、組織も一九五二年七月、「宮古教職員会」に改め、一九五三年十一月、連合体である沖縄教職員会の地区組織となつて、一九六〇年代の「日本国憲法の下へ」の、壮大な祖国復帰運動の一翼を担っている。機関紙はそれら運動の反映であり、宮古圏域の教育問題はじめ、世相を知る貴重な資料である。

大田静男（八重山郷土史家）

戦争は一日にして始まるわけではない。戦争を開始する過程は長い年月を要する。

国民が疑問を挟むことがないように、用意周到に国家の都合のいい法律を成立させ、やがて、異論をはさむ者を大衆から非国民として指弾させ、孤立させる。そして弾圧。他国の歴史や文化を蔑み、破壊し異民族の血が滴ることを平和のためだと宣言する。

蛮行に熱狂し支持する国民。そんな国民に洗脳する（教育）こそが伏魔殿の玉座にいる者の陰謀だ。

教育はすべてが、玉座に忠誠を尽くすためにある。

琉球処分後「四民平等」などによって、泥にまみれていた百姓にも教育権が与えられた。

それは、玉座へ忠誠を誓うことであった。

ひとは、それを（皇民化教育）と呼ぶ。

「国家への忠誠心が薄い」といわれると、沖縄教育界あげて、玉座への忠誠心を示した（死の美学）を説いた。

そのなれの果ては、鉄の暴風、マラリア地獄という、あまりにも残酷な形で終焉した。

骨の髄まで浸み込んだ飼犬精神に向き合うことから始めなければならなかった。

米軍占領下、マラリアの猖獗、食糧難、荒廃し混乱する社会。米軍という巨大な権力と結託する島の有力者。

それと対峙しながら、「戦後教育をどう進めるべきか」粟粒のような島で、消化不良の（皇民化教育）をかかえながら、

こどもたちの瞳に虹を取り戻そうとした教師や教育関係者の懊悩と熱意が

「新世代」には込められている。

幻ともいえる本著が復刻された意義は大きい。

発行に寄せて

川井 勇（沖縄大学人文学部教授）

戦後七〇年にあたり、極めて貴重な史料が復刻されることを喜びたい。今回復刻される史料は、一九四七年から琉球政府発足後の一九五三年くらいまでの奄美、沖縄、宮古、八重山各群島における教員団体機関誌である。教育再建はどのように、どのような思いを持って進められたのか、占領初期の奄美、沖縄、宮古、八重山における教育の動向を知る上で極めて貴重な史料である。

奄美諸島と沖縄にとつての七〇年は、他府県の七〇年とは大きく意味が違う。沖縄本島では「鉄の暴風」と表現されるほどの砲火と地上戦により、人も物も、蓄積されてきた文化遺産も暴力的に限りなくゼロに巻き戻されてしまった。

復帰後に作られた「艦砲ぬ喰え残さー」という新沖縄民謡がある。艦砲射撃（戦争）に人も故郷も食べられてしまった、生き残った者は艦砲の喰い残しさ、この理不尽を子孫末代まで伝えていこうじゃないかというようなすさまじい歌なのだ。まさにそこから始まった。

一九四六年一月二九日、GHQは北海道、本州、四国、九州、対馬諸島、北緯三〇度以北の琉球諸島を日本とし、それ以外を日本政府の行政権から分離する覚書を発し、奄美・沖縄は日本から切り離された。さらに四群島が統合（一九五一年四月琉球臨時中央政府、一九五二年四月琉球政府）される以前、少なくとも一九五〇年ころまでは軍事上、群島間の交通が厳しく制限されており、奄美、沖縄、宮古、八重山の各群島は、それぞれ「島（群島）」ごとに戦後復興に取り組んだ。

復興はまず教育から、という意識は各群島に共通しているが、島独自の教育復興の様子を本史料集成から読み取ることができるだろう。戦後七〇年、日本国と沖縄の間で積み残された課題は少なくない。占領初期の原点に戻り、戦後教育をとらえ直す作業が広く行われることを期待したい。

原誌発行——奄美大島連合教育会、奄美大島連合教職員組合／宮古教育会／八重山教育会／沖縄教育連合会

占領下の奄美・琉球における教員団体関係史料集成 全7巻・別冊1

1947年2月～1953年3月「編集復刻版」

◎収録内容 ※第1回配本は第6・7巻です。別冊（解説・総目次・総索引・附表）は第3回配本に付きます。

配本回数／刊行・本体価格	複製版巻数	群島名	収録史料名（発行年月）	原本提供機関・個人
第2回配本 2016年4月刊行 本体84,000円＋税 ISBN978-4-8350-7834-2	第1巻	奄美群島	『教育大島』第一巻第二号（推定）（一九四七年二月）～第三巻第四号（一九四九年五月） 『教育と文化』第三巻第九号（一九四九年二月）～第四巻第一〇号（一九五〇年一月） 『教育と文化』第四巻第一号（一九五〇年一月）～第五巻第七号（一九五一年七月）	鹿児島県教職員組合奄美地区支部、鹿児島県立奄美図書館、琉球大学附属図書館、宮古島市教育委員会、石垣市立図書館、那覇市歴史博物館、うるま市教育委員会、沖縄県公文書館、沖縄県立図書館、仲宗根将二（宮古島市）、瀨名波長宏（石垣市）、上原実氏（糸満市）
第3回配本 2016年7月刊行 本体56,000円＋税 ISBN978-4-8350-7839-7	第2巻	奄美群島	『教育と文化』第五巻第八号（一九五一年八月）～第六巻第七号（一九五二年七月） 『教育と文化』第六巻第八号（一九五二年八月）～第七巻第五号（一九五三年三月）	同上
※ 第1回配本 2015年12月刊行 本体56,000円＋税 ISBN978-4-8350-7842-7	第3巻	奄美群島	『宮古教育』第一巻第一号（一九四七年九月） 『教育時報』第一号（一九五〇年四月）～第三七号（一九五一年一月）	同上
	第4巻	奄美群島	『新世代』第一号（一九四八年二月）～第六号（一九五〇年七月） 『新教育』第一号（一九四八年八月）～第一六号（一九五一年八月） 『新教育ニュース』第二号（一九五二年八月）～第八号（一九五二年一月）	同上
	第5巻	奄美群島		同上
	第6巻	八重山群島		同上
	第7巻	沖縄群島		同上

- ◎体裁——A4判／上製／総約二、四四〇ページ ※史料は基本的に原寸収録しています。
- ◎揃定価——本体169,000円＋税 ISBN978-4-8350-7833-5
- ◎別冊——解説・総目次・総索引・附表「A5判並製」分売価格本体2,000円＋税 ISBN978-4-8350-7845-8
- ◎編集委員——（代表）藤澤健一（福岡県立大学）・近藤健一郎（北海道大学）・櫻澤誠（立命館大学）・高橋順子（日本女子大学）
戸邊秀明（東京経済大学）。（編集協力）田中萌葵（北海道大学大学院）。
- ◎推薦——弓削政己（奄美市文化財保護審議会長）・仲宗根将二（宮古郷土史研究会顧問）・大田静男（八重山郷土史家）・川井勇（沖縄大学人文学部教授）

連携企画 藤澤健一編『移行する沖縄の教員世界——戦時体制から米軍占領へ』

予価本体4,500円・A5判並製カバー装・約400頁・2016年7月刊行予定

本書は、一九四〇年代の戦時体制から五〇年代の米軍占領期にかけての沖縄における教員史をひとつづきの移行期としてあらたに位置づけ直す。これはふたつの史料蓄積を一貫した視座から精査することではじめて実現した。沖縄県教育会『沖縄教育』（一九〇六～四四年）、ならびに本復刻（いずれも弊社刊）である。沖縄戦をはさんだ、未曾有の混乱期において教員たちの世界はどのように変容していたのか。戦前はどのように断絶し、そして連続していたのか。

沖縄史はもとより、現代日本史、教育史におけるフロンティア課題に挑む。本復刻の編集委員による共同研究の成果。

●表示価格はすべて税別。

不二出版

〒113-0025
東京都文京区向丘1-2-12
電話03-3812-4433
フアクシ03-3812-4464
振替001600294084